

文学博士有坂秀世君の「国語音韻史の研究」に対する授賞審査要旨

音韻の学たる、これを究めることの難さ、現代語よりは中世語、中世語よりは古代語、更に上代語に至つて、真に至難中の至難とされる。

本書の著者、有坂秀世君は、稀に見るよい耳の持主で、内外諸国音の異同を詳らかにし、また中国各地の方音を聞き分けて、如何なる微細な変異も聞き逃さず、或いは山東人、或いは巴蜀人と、半日これをとらえてその発音を点検することに、直ちにその方音の音韻体系を把握する耳をもつ。その上、夙に東西・古今の文献を駆使し、かねて現代国語学の劃期的発見たる橋本進吉博士の「上代特殊仮名遣」の問題に、博士の指導を受けぬ以前から、独自にその研鑽に没頭し、博士の指導を受けてからは、いよいよこれに傾倒し、そのいわゆる甲乙二類の別から出發して、終に橋本学説を大きく展開したものが、この「国語音韻史の研究」である。

有坂君の「国語音韻史の研究」は、第一部・第二部・第三部及び附録と後記とから成り立つ。

第一部は、上代以来近世に至る国語の音韻に関する史的論究で、本書の主要部を成す。その中の主な論文には次のようなものがある。

「国語にあらわれる一種の母音交替について」

此は、上代語の上に現われる音韻変化の精密詳細な検討から、特に印欧語の Ablaut にも比すべきエ列(乙)―ア列の交替、イ列(乙)―ウ列の交替、イ列(乙)―オ列(乙)の交替が、名詞・動詞・形容詞にわたつて広く起る法則

であることを発見した。

「古事記におけるモの仮名の用法について」

著者はこの論文に於て、古事記のモの仮名に毛・母二類の使い分けのあることを確認し、この使い分けを通して、古事記の國語に母音調和の存することを注意した。

「古代日本語に於ける音節結合の法則」

著者は、愈々この論文に於て、奈良朝時代までの國語に、母音調和の嚴存した事実を明確に論証した。これまでの「日本語には、ウラルアルタイ語通有の母音調和が無い」という内外古今の定説を覆えて國語の系統論に新生面を開いた日本語學の大発見である。

「諷經の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」

此は、前期唐音の資料による鎌倉時代の國語の音韻史的考察であるが、博引傍証、この方面に於ける空前の労作である。

「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」

此は後期唐音の資料による江戸時代の語音の音韻史的論述であるが、その細註と共に、前の論文と相並ぶ力作である。

「帽子等の仮名について」

本居宣長の字音仮字用格が、韻鏡によつて、凡ての「家」韻を、「褒」や「毛」までも、一律にアウ・カウ・タウ・ナウ・

ハウ・マウの類に決定したが、この中のハ・マの二行だけは、唇の作用が働いたため自然に円口となつて、ホウ・モウと発音していたものである事実を、争う余地なき該博な引証によつて明にしたもの。それが実には中国でもそうだったことを中国の文献に溯つて論定し、古来の争点を見事に解決し、保がホの仮名に用いられた所以、毛がモの仮名になつた所以を明かにした。

第二部は、上代の国語の書かれています漢字音を、原音に溯つて、中国音韻史論に入り、広い涉獵と、精しい考証と、世界の学界に問いたい力作である。主なもの次の如し。

「隋代の支那方言」

此は、日本の「漢音」の源流を溯り、隋の陸法言の切韻が基準とした漢音を追求して、河南の洛陽の音に、江東の音を参酌して成つたものと推斷する。

「漢字の朝鮮音についで」

此は、十一ヶ條の根拠を挙げて、南宋以下へ降るものではなく、十世紀(五代か宋初)頃の中国の首都、汴梁(開封)の標準音であつたろうと推斷する。

第三部は、著者の音韻論であつて

「音韻制度の本質についで」

「アクセントの型の本質についで」

「古音推定の資料としての音韻相通例の価値」

の三篇から成り、何れも今日の学界に重きを成しているものである。

「附録」は九篇の論文から成る。

「下二段活用の補助動詞「たまふ」の源流について」

「下二段活用の補助動詞「たまふ」の源流について再考」

この二篇は、本居宣長以来一定している祝詞・宣命の常套語「諸聞食」（あまのきこひ）は、天皇のお言葉であるから、すべからく「もろもろ聞きたまへ（下二段）よ」であるべき（「お聞き下さい」でなく「承れ」であるべき）理由を、意義並びに送り仮名の上から明快に論定した論文である。

以上は、本書の主な論文である。その他の論文も、それぞれに学界に寄與し後進を啓発するところが多大である。

著者は謙讓で、一語苟もせず、また態度が極めて慎重で、反対説の成立つ余地の無い確かさに達して初めて筆を執る故に、一論文を発表することに、新しい定説を造り上げて来た観がある。

有坂君には、別にその學位論文となつた名著「音韻論」があり、我が国の現代言語学界に新光明を投げている。

我が国の音韻論も、有坂君出でて欧米諸国の先進学者に恥じざるに至つたと言つても過言ではないのに、折あしく其の学説が戦時中であらわれたので埋没していた。しかし、著者の業績は、学界最高の榮譽を担わしめるにあたるものであると信ずるのである。